日本生命財団・学際的総合研究助成
都市環境イノベーション研究会・第 11 回研究会
議事録

日時：2018 年 1 月 20 日（土）15:00～18:15
会場：早稲田大学早稲田キャンパス 19 号館 713 会議室
記録：岩田優子＋箕浦豪

出席者（敬称略）：

研究会メンバー

松岡　俊二	早稲田大学国際学術院（アジア太平洋研究科）・教授
田中　勝也	滋賀大学環境総合研究センター・教授
勝田　正文（途中退出）	早稲田大学理工学術院（環境・エネルギー研究科）・教授
鈴木　政史	上智大学地球環境学研究科・教授
松本　礼史	日本大学生物資源科学部・教授

研究協力者

升本　潔	青山学院大学地球社会共生学部・教授
渡邊　敏康（Web 参加）	株式会社 NTT データ経営研究所・シニアマネージャー （早稲田大学創造理工学研究科博士後期課程）
平沼　光（途中参加）	東京財団・研究員・政策プロデューサー （早稲田大学社会科学研究科修士課程）
中村　洋	一般財団法人 地球・人間環境フォーラム・研究員

日本生命財団

広瀬　浩平	助成事業部部長

オブザーバー

李　洸昊	早稲田大学アジア太平洋研究科博士後期課程
覃　子懿	早稲田大学アジア太平洋研究科博士後期課程
吉田　朗	早稲田大学社会科学研究科博士後期課程
山田　美香	早稲田大学アジア太平洋研究科博士後期課程
ISTANTO Heri	早稲田大学アジア太平洋研究科博士後期課程
LUIS Francisco	早稲田大学アジア太平洋研究科修士課程
姚　子文	早稲田大学アジア太平洋研究科修士課程
朱　鈺（途中退出）	早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程
山本　健登	早稲田大学社会科学部

事務局

岩田　優子	早稲田大学アジア太平洋研究科博士後期課程
箕浦　豪	早稲田大学創造理工学研究科修士課程

報告１：田中勝也「持続可能な地域社会の形成にむけた協働ガバナンス指標化の試み」

・なぜ指標化するのか
・指標化（1）民間企業との協働
・指標化（2）NPO との協働
・指標化（3）住民組織との協働
・指標化
・ヒストグラム（1）民間企業との協働
・ヒストグラム（2）NPO との協働

・ヒストグラム（3）住民組織との協働
・協働ガバナンス指標が持続可能な地域社会に与える影響
・協働ガバナンス指標ランキング

<u>討論:</u>
松本:ヒストグラムに 0（ゼロ）がまったくプロットされていないのはどういうことか。

田中:見づらくなるため 0 は省いた。掛川市は NPO とのつながりが強いのか。

松本:行政とリンクのある NPO リストはある。市域の中にこれだけの NPO があるというのは、市役所ははっきり認識している。これはどこでもやっていると思うが、そうではないのか。

田中:どこでもやっているということはない。やっていないところの方がむしろ多い。

松岡:掛川市が我々に NPO リストを見せてくれたということは、公開性があり、しっかりしたリストだということ。市役所の職員自身が NPO を作って、古紙を集めたお金で太陽光照明を公園につけたりしている。そういうのをアクセプトする雰囲気が掛川市にはある。

勝田:新宿区の環境基本計画に関わっているが、新宿区ではお手伝いとして民間のコンサルティングを入れている。このアンケートで言う民間企業との協働の中に、そのようなものは入っているのか。

田中:そういう質問は、どの自治体からも受けていない。行政の方に民間がインプットしてサポートするような事業はおそらく自治体の中の話になるので、含まれていない。今回のアンケートでは、地域で実際にビジネスとして生業にしている企業を想定している。

升本:p.6 の目的変数とは何か。

田中:回答者の主観である。10 年前と比較して、それぞれの自治体で、3 社会について大きく改善したが 4 で、まったく改善していない、むしろ悪化したが 0、良くも悪くもなっていないが 3。0、1、2、3、4 で 2 が真ん中となる 5 段階で質問している。

松岡:p.10 の限界効果の比較で書いてある、低炭素社会では民間企業とのパートナーシップが結構意味があり、循環型社会だと住民組織で、自然共生社会だと NPO でというのは、感覚的にはすっきりする結果である。CO_2 の軽減では産業分野がやらなければいけないし、ごみは町内会や住民組織が重要。自然共生、生物多様性保全では NPO のようなところが熱心。この結果がロバストであれば、かなり合理的な結論が出ていると思う。そのあたりについて、関連する他の研究や客観的なデータとこの結果をどう比べて合理的な意味づけができるかが大事である。

田中:ロバストネスについてはあると思う。今言われたような細かいところの確認は、今後もう少し考えていく必要がある。そういう方向で取りまとめたい。

松岡:アンケートの点数化についてのやり方そのものについては、先行研究も多いのか。

田中:指標化に関する先行研究のレビューもしたが、あまり統一感がない。

松岡:分野は違うが、以前紹介した、William Easterly のバイとマルチドナーの ODA 評価は transparency の議論もしていた。

田中:William は、結構足し合わせ的な評価をしている。ああいうやり方もあるかと思う。

鈴木:質問項目は先行研究と関連しているのか。

田中:今回のアンケート主体である早稲田大学内のシンクタンクが、再生可能エネルギーなどの持続可能な社会についてのアンケートを過去に 3 回ほどやっていて、今回はそのスピンオフのような形で実施した。そのため、既存の質問項目を発展させる形の内容。先行研究とまでいかないが、まったくゼロから作ったわけでもない。

松岡:勝田先生が所長の環境総合研究センターが過去にやっている自治体アンケートを下敷きにして、今回そちらに依頼して一緒に実施した。一応、今までの経験は踏まえているということ。

報告２:松岡俊二「持続可能な地域社会のつくりかた:地方創生と社会イノベーションを考える」

・基調報告のポイント
・地方創生の失敗と「地方論」のあり方：何が問題なのか？何を問題とすべきなのか？
・基本概念の定義：場、協働ガバナンス、社会的受容性、共創、創発
・持続可能な地域社会形成の日本モデル（3 社会アプローチ）と 3 地方都市：長野県飯田市、静岡県掛川市、兵庫県豊岡市
・社会的受容性と「場」（協働ガバナンス）：3 都市モデルのまとめ
・第 1 部の研究成果報告のポイント
・第 2 部で議論したいこと

討論:

松本:社会的受容性の説明が定義だけだが、3+3 モデルは 3 都市共通の話なので、基調報告で説明をしていただきたい。3 ケースの報告でまたモデルの説明をして結果を話すというわけにはいかないと思う。

松岡:松本先生作成の図をここでひとつ入れて説明することにする。

田中:初めて聴く人も多いと思うので、スライドはもう少しシンプルにした方がいい。例えば、P.11 の「社会的受容性」については図を入れて見やすくする。その点以外は、全体を俯瞰しており良い内容だと思う。

升本:3 社会モデルの説明を最初に入れても良いのではないか。P.13 で突然 3 社会が出てきて、初めて聴く人にとっては唐突感があるのではないか。

松岡:p.2 で、大きな目次立てとして、3 都市については言及している。

渡邊:基調報告で、例えば飯田市が低炭素社会モデルであるというように聴衆にすり込んでいただければと思う。3 社会全体の話をしていただいた後、3 都市報告で個別の切り口から入れると思う。

松岡:それだけで終わらせたくはない。飯田は低炭素を切り口にしているが、言いたいのは持続可能な飯田をつくりたいということ。

渡邊:基調報告でのつかみを低炭素にして、3 社会報告の最後で、これまでの総括に加え、これからの内容として、低炭素だけではないと伝えれば良いのではないか。

松岡:なぜこの研究をしているのか、この研究はどういう意味があるのかというのを初めて聴く人にわかるようにしたいという思いが強い。

鈴木:これからの話は第 II 部ではないのか。

中村:基調報告のポイント 3 つ目の SDGs と日本の地域社会について、基調報告を聴く限り、あまりつながりがわからなかった。この点や地方創生については、第 II 部で議論するという理解でよいか。

松岡:第 I 部でも議論してもらって構わない。

岩田:3 都市各報告で話す内容は多いと思うので、基調報告で 3 都市モデル図などの概要を説明していただけるとありがたい。

松岡:役割分担の問題もあるが、2 年間の研究のポイントを絞った方が良い。3 都市報告でもメッセージをはっきりさせた方が良い。どういうことがこれからの日本の地域にとって大事なのか。詳細については書籍を読んでください、と持っていく。p.28 の社会的受容性についても、深入りするとわかりづらくなる。

松本:シンプルにするなら受容性を抜いて場が大事だとまとめれば良いのではないか。

松岡:そこまでするとシンプルすぎるので、研究の道具立ては提示するが、詳細までは踏み込まない。

岩田:p.28 の社会的受容性の関係性において制度的受容性が最後に来ているが、豊岡では別のまとめ方をしている。最後は市場的受容性が来るのが社会イノベーションの定義から考えても意味があると考えていて、豊岡では実際にそうなっている。ここでは掛川モデルの事例を取り上げているだけで、実際にはいろいろなパスがあって、特に政策的な示唆を与えているというわけではない、という理解で良いか。

松岡:多様なパスがあるのは当然のことで、その詳細についてはまだ整理できていない。

渡邊:聴衆者に向けてのメッセージは、場と社会的受容性について意識して話せば良いのか。

松岡:それよりも、飯田の社会イノベーションの創出は何がポイントなのか。それによって何が実現できてどういった効果があるのかを出していった方が良い。

報告3：渡邊敏康「飯田市の社会イノベーションと今後の展望」
・はじめに
・市民社会の取り組み
・産業社会の取り組み
・まとめ

討論：
渡邊：聴衆者からすると、まず図で見せてその後詳しい説明の方が良いのか。

松岡：おひさま進歩や多摩川精機の写真があった方がわかりやすい。丁寧に全部説明しようとしすぎて、却ってポイントがわかりづらい。スライドはこれでも良いので、ポイントを 3 つぐらいに絞って話した方が良い。最初に、聴いている人の多くは飯田市に行ったことがないので、飯田市はどういう街なのかを説明する。その上で、産業社会の多摩川精機と萩本さんの話、市民社会のおひさま進歩と原さんがやってきたことの話。3 つの観点から飯田市の社会イノベーションがどのように形成されたかという説明で良いのではないか。

岩田：飯田市が不便な場所であることを説明するために、地図を入れると良いかもしれない。

松本：社会的受容性の話をこれ以上掘り下げるのは難しいか。3+3 モデルは説明できないか。

渡邊：もう少し聴衆者にわかりやすくすると、先ほどの論理構成だと、リーダーシップと場があって独自の EMS ができたというような印象に残る伝え方ができれば、もう少し社会的受容性というキーワードも浮き出てくるように思う。

松岡：p.6 の表では基本的に社会イノベーションの説明をする。社会的受容性の詳細については書籍で説明するということでお願いしたい。

渡邊：全体に関わるところでは、社会的受容性という言葉は誰が受容するのか伝わりづらいと感じた。

報告4：松本礼史「掛川市の社会イノベーションと今後の展望」
・はじめに
・掛川市の位置
・掛川市におけるごみ減量の経緯（1）
・掛川市におけるごみ減量の経緯（2）
・ごみ減量大作戦（2006 年 11 月～）
・社会的受容性各要素の内容
・掛川市における循環型社会形成と関連事項
・社会的受容性の確立過程（1）
・社会的受容性の確立過程（2）
・成功要因の考察
・「場」（協働ガバナンス）の発展・形成メカニズム
・アクター間の社会的受容性の展開メカニズム
・社会イノベーションの共創・創発メカニズムとして
・都市（地域）の個性（特性）と社会イノベーションとの関係
・掛川市の持続可能性について（5 年ごとの人口増減率の推移）

・今後の展望

<u>討論:</u>
松岡:掛川市がどのような街なのか最初に簡単に説明した方が良い。東山の茶畑の写真など入れて、工業集積もしているが、もともと茶の名産地というようなイメージがあった方が良い。今後の課題として、シャッター商店街の写真が最後に出てきてもおもしろい。

中村:p.17 の急な人口減少は市町合併の影響なのか。

松本:静岡市も浜松市も静岡県全体が減っており、合併で周辺地域が増えたからというわけではない。

中村:p.18 の環境人材データベースは役立っているのか。

松本:データベースという言い方をしたが、クリーン推進員経験者は、市役所の環境部門と密に連絡をとるので、NPO 法人おひさまとまちづくりのケースなど、市役所でどういった知見を持った人がどこにいるのかを把握している。市役所と市民の距離が近いという印象。

鈴木:今年、第四次循環型社会形成推進基本計画が策定されると思うが、その中で、高齢者のごみ出しで自治体と市民が連携するなど、高齢化社会に対応したきめ細かい対応が謳われている。

松本:人口が減るからこそ、循環型社会が困難になるので新たな担い手が必要になる。

岩田:pp.13～16 の論点の中に含まれていない、場と社会的受容性の相互関係について、掛川の場合はどういう結論を得たのか教えていただきたい。

松本:場が社会イノベーションを生み出す条件であり、イノベーションが地域に受け入れられる条件として社会的受容性がある、ということではないかと考えていたが、そうすると受け身の受容性論のような話になってしまうので、用語を検討中。

松岡:受容性は passive も含めていろいろな形がある。ごみのように地方自治体の責任としてやっていく場合には、表面的にはトップダウン的な形もある。最後の TASKI についてはもう少し強調してほしい。飯田市も入っているし、横展開の問題として、スライド 1 枚ぐらい使う価値はある。

松本:掛川市が飯田市の市民発電所の知見を使ったという話もあったので、そのあたりも含めたい。

<u>報告５:平沼光「シュタットベルケと地方創生」</u>
・地域エネルギーの活用
・シュタットベルケ（Stadtwerke）とは
・シュタットベルケハイデルベルグのエネルギー調達構成比と国のエネルギー構成比
・シュタットベルケハイデルベルグのエネルギー関連設備
・シュタットベルケをサポートする VPP（ヴァーチャルパワープラント）の存在：ドイツ Trianel 社の例
・Trianel GmbH の市町村ネットワーク
・群馬県の再エネ電力を世田谷区が購入する取り組み

・シュタットベルケの社会的影響

討論:
松岡:ドイツの事例から何を学べるのか。ドイツは連邦国家なので、もともと分権的にできている。日本のような中央集権国家とは根本的な社会構造が違うところでこういう事例がある。その点を踏まえた上での教訓を、最初と最後で触れた方が良い。学ぶときの立ち位置をはっきりさせる。

升本:日本では、かつての三セクのような非効率で自治体職員の天下りになってしまう印象がある。ドイツの経験から、日本ではどういった違うパスを提案できるのか。

松岡:基調報告でも言っているが、Government solution や Market solution 単独では限界がある。第三の道としての Community solution の 3 つをどううまく組み合わせて新しい仕組みを作っていくのか。升本さんが言うように、昔の Government solution ベースの三セクを作っても大赤字になるのは目に見えている。新しいアプローチとして新しい革袋に入れなければいけないというのをはっきりさせる。

平沼:地域の人が自分たちの地域益を理解しているところが三セクとは違う。大手電力会社より 1〜2%高い値段でも、自分たちの地域益になるということで電力を買っている。これはまさに社会的受容性である。

松岡:日本の消費者でも数パーセント程度のグリーンプレミアムは払っている。ドイツの場合はそれがある意味ローカルプレミアムで、彼らの帰属意識やアイデンティティになっている。現状のふるさと納税と違い、本当の意味でのローカルプレミアム、ふるさとプレミアムを払うような形が日本でどうやったらできるのかを考えないといけない。基調報告でも、日本の今の地方創生のやり方では失敗するということを強調する予定である。

報告6:岩田優子「豊岡市の社会イノベーションと今後の展望」
・はじめに
・豊岡市の社会イノベーション：背景
・豊岡市における自然共生社会の形成
・コウノトリ農法の開発・普及における社会的受容性と協働ガバナンス
・論点①:「場」（協働ガバナンス）の発展・形成メカニズム
・論点②:「場」と社会的受容性の相互関係
・論点③：アクター間の社会的受容性の展開メカニズム
・論点④:「場」と社会的受容性による社会イノベーションの共創・創発メカニズム
・豊岡市の成功要因の考察①：社会的受容性
・豊岡市の成功要因の考察②：協働ガバナンス
・水田の耕作放棄による湿地の創造
・論点⑤：都市（地域）の個性（特性）と社会イノベーションとの関係（まとめ）
・今後の課題と展望

討論:
松岡:もう少しポイントを絞った方が良い。

鈴木:豊岡市のノスタルジーが地域的受容性というのは、非常に大事である。飯田市のボトムアップの取組みや、掛川市の生涯学習のようなところも地域的受容性である。そうした地域的なことをハイライトしていけば、なぜこの 3 都市なのかがわかりやすくなるのではないか。

松本:松岡先生の 1〜5 の論点をキーに構成しているが、掛川報告の場合は最後に付け加える形にしている。まとめた方が良いか。

松岡:フォーマットに捉われず、それぞれの個性を出せば良い。

事務連絡･ご挨拶

松岡:2 月 4 日（日）のワークショップについては直前に詳細を案内するが、PJ 関係者には 11 時半に来ていただき、弁当を食べながら当日の動きや舞台回しについて説明する。今日の議論を踏まえて修正した資料を 1 月 22 日（月）の 12 時までに岩田さんに送る。その後も適宜 PPT 修正していただき、2 月 1 日（木）までに最終版を送る。数が多いので、できるだけ当日持ち込みは避けてほしい。第 I 部は時間的にかなり厳しいが、押したとしても 3〜5 分で収めていただきたい。第 II 部のおひさま進歩の原さんの代理として、岡山大学の地域総合研究センターで中国地方の地域おこしなどを研究されている吉川先生に依頼した。延長しても 17 時 10 分には終わりたい。今回は日生 PJ 最後の研究会ということで、最後に日生財団の広瀬さんからご挨拶をお願いします。

広瀬:「都市環境イノベーション研究会」も 11 回目ということだが、うち 8 回ぐらいは出席した。これだけ多くの研究会をこなしていただいたのは初めてである。2 月 4 日に向けてご準備いただいているところだと思うが、1 点だけ、大隈記念講堂という立派な会場ですが、まだ参加申込者が 50 人弱で、PJ 関係・ゲストスピーカーで登壇される方が 20 名ぐらいなので、一般参加者をもう少したくさん来ていただきたい。まだ申込〆切までに 10 日ほどあるので、声がけしていただきたい。もう 1 点、どうしても一人当たりの持ち時間が限られているので、長くなってしまう。過去のワークショップでも、余裕を見ていても押してしまい、最後のディスカッションの時間がとれないことになってしまう。今回、せっかく外部のゲストスピーカーの方もたくさん来られるので、そうした方が討議するための時間は十分に確保していただきたい。主催者としても一リスナーとしても、そうしていただきたいので、よろしくお願いします。

松岡:これだけ熱心にやってきたことを、最後、できるだけ多くの方に聴いていただきたいので、2 月 4 日はよろしくお願いします。

以上